

伊藤之雄著

『京都の近代と天皇』

——御所をめぐる伝統と革新の都市空間

1868-1952

吉岡 拓

本書は、京都市政史編さん委員会の代表を務める著者の伊藤之雄氏が、『京都市政史』刊行の準備過程で抱いた着想を書籍としてまとめたものである。著者自身は本書を『京都市政史』の「兄弟本」と位置づけているが、内容的に見て、著者が近年発表してきた近代日本の立憲君主制や天皇に関する研究・評伝の姉妹本ともいえる。

一、本書の概要

まずは、本書の概要を示したい。全体の構成は以下の通りである。

京都御所・御苑と近代日本——はじめに

第一章 御所の整備と御苑の創出による伝統と革新

第二章 平安遷都千百年記念事業と観光名所としての御所

第三章 御所・御苑と市民の新しい関係

第四章 窮屈になってゆく奉祝行事

第五章 御所・御苑空間と戦後京都
京都御所・御苑と将来の京都——おわりに

はじめには、全体の内容に若干触れつつ、本書の目的と方法が提示される。一言でまとめれば、それは京都御所・御苑空間という場が近代日本、ならびに近代京都の歴史上有した意味について、「伝統」と「革新」という二つの概念を軸に検討していくというものである。本書のサブタイトルが「御所をめぐる伝統と革新の都市空間 1868-1952」とされる所以である。

第一章では、明治維新から帝国議会開設前後までの御所・御苑空間について論じられる。明治維新後、御所・御苑は荒廃したが、明治十年（一八七七）に京都へ行幸した明治天皇が「大内保存」を命じることで状況は一変する。京都に愛着を持っていた明治天皇は、十一年十月には即位大礼を京都御所で開催することを提言し、さらには東京遷都で衰退した京都を、伝統と革新が調和した形で復興させる、という構想を示した。政府（岩倉具視・伊藤博文）・京都府（北垣国道）はこの明治天皇の構想を踏まえ、伝統（御所保存）と革新（御苑整備・琵琶湖疎水事業など）を調和させた京都復興策を展開していく。また、一連の過程で御所拝観内規や、天皇の入京・出京時に烏丸通―三条通―堺町通を利用するという行幸ルートが定着した。社会的地位により御所拝観の可否や行幸時の奉迎場所を区別するという秩序も、帝国憲法発布前後の時期よりゆるやかながら形成されはじめた。

第二章では、平安遷都千百年記念事業から大正大礼頃までについて論じられる。平安神宮の創建と日清・日露戦争という二つの

対外戦争を経て、御所・御苑（特に建礼門前）と平安神宮が京都市における国威発揚行事のセンターとなった。日露戦争後の都市改造事業の結果、市民による大規模な奉送迎を可能とさせた新しい行幸ルート（鳥丸通―丸太町通）が完成し、大正大礼を前に京都御苑のさらなる改良も行われた。以上の展開に大正デモクラシー的潮流が加わることで、京都市民・府民は天皇への敬愛を発露させ、時として秩序を乱しながら奉送迎や奉祝行事に自発的に参加するようになり、社会的地位により奉迎場所を区別するという秩序は弱まりはじめる。右に関連して、御所拝観が制限されていることに市民が反感を募らせはじめると、宮内省は日露戦後に一旦緩和した外国人拝観規則に、再び制限を加えた。

第三章では、大正期について論じられる。御苑はこの頃より改革のイメージから伝統のイメージを発信する場へと変化したし、観光名所として定着しはじめる。また、青年団の幹部や国勢調査員が新たに御所拝観を許可されるようになった。一方、奉祝行事については、一九二〇年代に入ると青年団や在郷軍人会を担い手とした行事が新たに行われるようになり、行事参加者の秩序からの逸脱がさらに目立つようになる。これを受け、奉祝行事を制度的にも平等で規制の緩やかなものへと変容させようとしていた宮内省（牧野伸顕）は、虎の門事件の衝撃もあって再び規制を加えるようになり、市民の不満は募った。京都の都市改造については、三大事業を引き継いで道路拡幅という「革新」をさらに進める中で、木屋町通の景観保護という「伝統」に関する問題が浮上し、両者の調和がはじめて市民の間で議論されることとなった。

第四章では、昭和戦前期について論じられる。昭和大礼は天皇

の奉送迎について社会的地位に左右されない平等化が図られた反面、奉祝行事には厳密な規制が敷かれ、大礼全体に清浄さと国風（東洋風）が付与された。この大礼前後より、御所・御苑の観光地化がさらに進み、御所拝観資格も大幅に緩和されていく。その一方で、御所・御苑、特に建礼門前は青年団や在郷軍人会などの団体に精神修養の場として用いられるようになり、行事には厳しい規制が敷かれるようになった。こうして、昭和十年（一九三五）の天皇機関説事件の頃より御苑空間の聖域化が顕著に進行するが、以上の過程は京都市民・府民が天皇への敬愛の念を発露することを困難にさせるものであり、奉祝行事は大正期ほどの盛り上がりを見せないことはもちろん、参加者数自体も減少した。戦時期に入ると、御所・御苑の聖域化はさらに進み、国威発揚行事にすらそれらの場所を用いることが憚られるようになる。また、戦況の悪化もあり、観光客は皇紀二千六百年にあたる昭和十五年（一九四〇）をピークに停滞した。

第五章では、戦後期について論じられる。戦後、御所・御苑の聖域性は薄れ、その利用法をめぐり様々な道が模索されるが、最終的には文化遺産として現状を基本的には維持し、公園（国民公園）として利用する方向で確定した。御所の公開も進められ、御所・御苑は再び観光地化を遂げる。昭和二年（一九四七）に行われた戦後初の京都行幸の際には、市民は一九二〇年代前半までに見られた様子と同様に、敬愛を発露して天皇を迎えた。一方、御苑（建礼門前）は昭和二十一年（一九四六）から労働者集団からメーデーの会場に用いられるようになったが、GHQの指示を受けた厚生省が国民公園を政治的・宗教的集会に利用することを規

制するようになり、日本が独立を回復させた同二七年以降、御苑のメーデーへの利用は禁止された。

おわりにでは、全体の論点を計五点にわけて再整理すると共に、現代までの展望が述べられる。

二、本書の成果

本書の成果としてまず第一にあげられるのは、明治維新から戦後までの御所・御苑の変遷について、通時的かつ詳細に検討していることである。明治維新以降の御所・御苑については、明治前期については一定の研究蓄積があったものの、他の時期については研究はごくわずかしかな存在せず、その歴史の変遷については不明な部分が多かった。その点を踏まえた時、新聞の雑報記事にまでくまなく目を通し、閲覧に大きな制約の伴う京都市役所永年保存文書をも可能な限り利用して、明治前期から戦後までの御所・御苑の変遷をあきらかにした本書の意義は、計り知れないものがあるといえる。あとがきで述べられている「知力の限界に近い作業を行った」という著者の言葉は、決して大げさな表現ではないであろう。

第二に、右に述べた明治維新から戦後までの御所・御苑の変遷を、都市京都全体の動向、特に十九世紀末よりはじまる都市改造の問題と関連づけながら検討していることである。一九八〇年代以降の都市史研究の進展の中、京都についても明治期を中心に研究の蓄積が進んだが、その多くは京都の産業化・工業化について議論したものであり、古社寺の維持などに見られる「伝統」保存（創出）や、それを利用した観光業開発の問題について、積極的

に議論が行われることはなかった。本書が、行幸ルートの整備という問題から道路拡幅事業の問題を検討したこと、御所・御苑の観光地化という問題にスポットを当てたことなどは、近代京都都市史研究に新たな論点を提示したものと評価できよう。

第三に、御所・御苑、ならびに平安神宮の祭礼空間としての役割に着目したことである。これにより、従来一括りに理解されていた御苑空間の中でも建礼門前広場が種々の行事において特に重要な位置を与えられていたこと、奉祝行事の担い手として大正後期より青年団や在郷軍人会が加わりはじめ、これらの団体がやがて行事の性格自体を変容させていくこと、昭和大礼前後より御所拝観や奉祝行事の平等化と御所・御苑の聖域化、奉祝行事の秩序化が同時並行的に進むこと、戦時期になると国威発揚行事で主に用いられるのは平安神宮となり、御所・御苑が用いられる機会は逆に減少していくこと、などの興味深い事実があきらかにされることとなった。とりわけ、御所拝観・奉祝行事参加について平等化と聖域化（秩序化）が同時に進行するという点は、普通選挙法と治安維持法の同時成立といった問題とも重なる部分が大きいといえ、一九二〇年代という時代を考えていく上で今後さらに検討されるべきものであると考える。

第四に、近代天皇制の問題を検討していく上での大正期の分析の必要性が、本書を通じて改めて提起されたことである。周知の通り、近代天皇制研究は明治維新から帝国憲法発布・帝国議会開設頃までの時期、ならびに昭和戦前期について分厚い研究の蓄積がある一方で、大正期については、それらの時期に比べ研究が進んでいないのが現状である。しかし、本書で提示された、奉祝行事

における京都市民・府民の秩序から逸脱した形での参加や、政府・官僚が天皇と国民とのあるべき関係性をめぐり右往左往する姿などは、この時期を検討することの重要性を示しているといえる。大正期の検討の必要性を強調した研究自体はこれまでも少なからず存在したが、御所・御苑という一つの事例の検討からその点を改めて提起できたことの意義は大きいと評者は考える。

三、本書の疑問点

本書への評者の疑問点の第一は、御所・御苑の整備や近代京都の発展に明治天皇が果たした役割について、本書が過剰に高い評価を与えていることである。本書では、主に『明治天皇紀』の記述に拠りながら、明治十年より開始される京都御所の保存と御苑の創出、ならびに伝統と革新を融合させた京都復興が図られるようになったのは、明治天皇の意向に端を発するものであったと、推測も込めながら論じられている。しかし、あえて述べるまでもないことであるが、『明治天皇紀』は明治天皇の偉業を称えるため、著者自身も再三強調している、理想化された明治天皇像が普及しはじめる一九二〇年代に編纂されたものであり、その記述をそのまま受け入れることには慎重でなければならぬ。明治天皇の役割を強調する根拠の一つである、明治十一年十月に天皇がロシアの例に倣い即位大礼を京都で開催することを提言したという『明治天皇紀』の記述については、事実関係において不自然な点があることは既に高木博志氏が指摘している通りであるし、^①天皇が御所保存・御苑の整備の意向を最初に示したとされる明治十年二月の内論についても、その内容は内帑金を基に御所保存の方策

を講じるよう京都府に命じているにすぎず（つまり、公園を作るというような具体的な指示はなされていない）、また、そもそもこの内論自体が、当時九門内の活用を進めていた横村正直が岩倉具視に相談したことを契機に出されたものであったと評者は理解している。^②総合的に見て、明治天皇が京都に愛着を持ち、即位大礼を御所で開催することに賛意を示していたことは確かであろうが、そのことを以て御所の保存・御苑の整備が天皇個人の意向を発端としていた、とまで評価することはできないであろう。ましてや、天皇が伝統と革新を融合させた京都全体の復興をも構想していたとする見解は、あまりに想像を逞しくしすぎた議論ではないだろうか。

第二に、京都市民・府民と天皇との関係性についての理解・評価についてである。本書では、序論で近世禁裏御所への民衆の参入行為を根拠に、御所や天皇が当時の京都の民衆にとって「誇りの源泉」であったと述べられ、本論では、天皇・皇室の奉送迎や奉祝行事に対し市民・府民が秩序を乱した形で参加することについて、娯楽的要素も含みつつ、天皇や皇室への敬愛（一部の箇所では、「自然な敬愛」と記載）が発露されたものと評価している。全体として、京都の民衆と天皇とは一貫して絆で結ばれていた、というのが、著者が提示した京都市民・府民と天皇との関係性についてのイメージである。「絆」という、抽象的ゆえに一人歩きしかねない言葉を、研究者以外の読者の存在も想定した書籍の中で用いることの危うさについては、ここでは問わない。問題は、本書で示された事例に対し、著者のような評価を与えることが果たして妥当なのか、という点である。前者については、御所への

参入行為という事実だけから「誇りの源泉」とまでするのは、飛躍があると言わざるを得ない。参入行為が行われていたということ、天皇や御所の存在を誇りに思っていたかは全く別次元の問題だからである。後者については、祭礼空間において民衆が秩序を乱すということ自体の歴史的位置について考慮する必要がある。この点について一言すれば、異形の姿での踊りへの参加や、その中での「エライヤツチャ、エライヤツチャ」という掛け声は、京都では十九世紀以降の社寺創建・改築や河川浚渫作業の砂持の際などに行われていた習俗の一つで、作業自体への感謝や祝意のあらわれというよりは、民衆自身の遊興と自己解放という側面が強かった^③。現象面だけで評価するならば、奉祝行事などの事例から見えてくるのは、天皇や皇室への敬愛の念というよりは、二十世紀に入ってもなお継続される民俗的な慣行の根強さと、天皇関係の行事をもそうした遊興や自己解放の機会へと置き換えていく民衆達のしたたかな姿なのである。むしろ議論されるべきは、こうした習俗と天皇関係の行事との接合が、結果として民衆意識の中に何をもたらしたのか、という点であろう。

第三に、全体として、御所・御苑という空間を京都市や京都府がどのように位置づけていたのか、という点についての検討が、中央政府・官僚のそれに較べ少ないことである。この点について十分な検討がなされているのは戦後の部分（第五章）だけで、他の時代については奉送迎や奉祝行事への対応について若干触れられているにすぎない。しかし、明治前期における御所・御苑の整備についていえば、ある時期までは京都府の主導性が顕著であったと評者は考えており、また、大正期より御所・御苑の観光名所

化が進むという本書があきらかにした重大な論点の一つも、京都市や京都府発行の観光案内書に御所や御苑の案内が詳細に記載されているという事実から推測するに、これら自治体による何らかの政策的取り組みがあったと考えられる。史料的な限界もあつたのではないかと想像するが、本書が示した御所・御苑空間をめぐる中央政府と市民・府民との綱引きという図式に、地方自治体の動向を盛り込むことで、さらに立体的な歴史像を提示することができたのではないかと考える。

以上、評者の感想を述べてきたが、本書が全体としては優れた成果であり、今後の京都市史研究、近代天皇制研究にとつて参照されるべき成果であることは疑いない。評者を含めたこの分野の研究者は、本書の成果を肯定的であれ批判的であれ正當に継承し、斯界のさらなる発展に尽くさねばならないであろう。

① 高木博志『近代天皇制の文化史的研究』（校倉書房、一九九七年）七三頁。

② 拙著『十九世紀民衆の歴史意識・由緒と天皇』（校倉書房、二〇一二年）二七―三三頁。

③ 相蘇一弘『踊る民衆と幕末社会』（『大系 日本歴史と芸能』十、平凡社、一九九一年、所収）、福原敏男『普請・砂持ちの風流』（『国立歴史民俗博物館研究報告』三三、一九九一年）、前掲拙著、二二九―二四三頁。

④ 前掲拙著、二〇―二四六頁。

（四六判 三二二頁 二〇一〇年九月 千倉書房 税込二七三〇円）
（日本学術振興会特別研究員（PD））